所蔵者　国泰寺（高岡市太田 184）

# 寄託資料調書

## ○明治 2 年(1869)3 月 20 日付 西郷隆盛書簡（得（とく） 藤長（とうちょう）宛）

**分　類**　1.歴史資料－01.古文書・古記録

**年　代**　明治 2 年(1869)3 月 20 日付

**作　者**　西郷隆盛（1828～77）(※1)

**宛　所**　得 藤長（生没年未詳）(※2)

**数　量**　１通

**寸　法**　〔本紙〕縦 18.5 ㎝×横 104.4 ㎝　〔全体〕32.8×143.5

**材　質**　紙本

**技　法**　墨書

**形　態**　継紙（扁額）

**付属品**　なし

**解　説**

“維新三傑”の一人に数えられる、薩摩藩の西郷隆盛の書簡である。

宛所は奄美大島の島役人・得 藤長。安政の大獄を避けるため、安政 6 年(1859)1 月から文久 2(1862)年 1 月まで、藩は西郷を奄美大島に潜居させた。得はその間に西郷、及びその子供たちの世話をした人物であり、本書にみえるように明治以降も親交が続いていた。

内容は西郷の近況報告である。得よりの手紙と着物の謝礼ののち、西郷が慶応 4 年(1868)2 月、戊辰戦争で新政府軍の東征大総督府参謀として江戸へ進軍してからのことが記されている。以下摘記する。翌年の鹿児島帰郷、次いで 8 月に出陣（北越戦争支援のため）、9 月庄内藩討伐、11 月初旬に鹿児島へ再び戻る。以前よりも体調が悪化したので隠居するつもりであったが、翌明治 2 年 2 月に参政に任命された。奄美大島に帰るつもりであったが致し方ない。島に残した 2 人の子供への世話を謝している。そして追伸には慶応 4 年 8 月に越後国五十嵐川付近（現新潟県三条市）にて長岡藩との戦いで戦死した弟吉二郎（享年 36）(※3)の死を嘆いている。

戊辰（北越）戦争の経緯や、西郷自らの動向、そして弟の死について感情を吐露するなど、気の置けない相手ならではの貴重な書簡といえる。

ちなみに、この書簡は鹿児島で書かれたものであり、同年 5 月 1 日に箱館戦争の応援に総差引として藩兵を率いて鹿児島を発っている（5 月 18 日、箱館・五稜郭が開城し、戊辰戦争終結）。

本史料の裏には大方が破れているが、翻刻が貼られている。メモによると、加治木常樹編『西郷南洲書翰集』（実業之日本社、明治 44 年）とわかる。また大川信義編『大西郷全集』第 2 巻（同刊行会、昭和 2 年）にも翻刻されていることが、本林義範氏（国泰寺派全生庵副住職）の文章（国泰寺 HP、2018 年 1 月）に紹介されており、以前より世に知られている書簡といえる。

本史料は国泰寺本堂の向かって右の間に掲げられていた。宝物台帳に記載はあるが、寺に入った年代、経緯などは不明であるという。

状態は本紙全体にヤケ、シミがみられる。

---

【注】

**※1　西郷 隆盛　さいごう たかもり　　文政 10(1827).12.7～明治 10 年(1877).9.24**

政治家。薩摩の人。通称、吉之助。号、南洲。討幕の指導者として薩長同盟・戊辰戦争を遂行し、維新の三傑の一人と称された。新政府の参議・陸軍大将となったが、明治 6 年（1873）征韓論に関する政変で下野、帰郷。明治 10 年（1877）西南戦争に敗れ、城山で自殺。

（「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」）

**※2　得 藤長　とく とうちょう　　生没年未詳**

奄美大島、龍郷村嘉渡（たつごうそんかど）の人。安政 6 年(1859)1 月、西郷隆盛が謫居していた時に木場伝内、桂久武らと共に西郷の世話をしている。その際は「間切横目」（現警察官）であったという。その後、「與人」（村長格）に昇進し士族に列せられている。西郷が復帰してのちも西郷が島に残した子供の世話をみている。また明治以降も書簡や着物を送るなど親交は続いていた。

（大川信義編『大西郷全集』第 2 巻、同刊行会、昭和 2 年）

**※3　西郷 吉二郎 さいごう きちじろう　　天保 4 年(1833)～慶応 4 年(1868)8 月 14 日**

幕末の武士。天保 4 年生まれ。西郷吉兵衛の次男。西郷隆盛の弟。薩摩鹿児島藩士。隆盛の薫陶をうけて尊王派として活動。戊辰戦争には、監軍として越後（新潟県）長岡城の戦いに参加。五十嵐川の戦闘で負傷し、慶応 4 年 8 月 14 日死去。36 歳。名は隆広。通称は別に金次郎。

（講談社「デジタル版 日本人名大辞典+Plus」）

全体

後半部拡大